

あなた自身であれ！

桧山尚子[†]（広島県農業共済組合連合会三次家畜診療所）



まず、女性獣医師についての原稿を執筆する機会を与えてくださったことについて、御礼申し上げたい。それは、自分を振り返る良い機会となったからである。私は、NOSAI広島で20年間産業動物獣医師として臨床現場で働いてきた。その間、結婚も出産も経験することなく、今に至っている（これは仕事の忙しさというよりも、私自身気付かない何かが、異性を遠ざけているのだと思われるのだが）。そのため、これまでの執筆者のような仕事と家庭の両立についてアドバイスする内容とは異なってくると思う。私は私について述べてみようと思う。現在までの私自身について、私なりの解釈を。

1 子供時代から、就職、一人前になるまで

私は麻布大学に入学する前から、臨床の道を目指そうと考えていた。大学で実際に獣医学を学び、獣医師についての情報を得てもそれは変わらなかった。その決意については、私の性格に起因することだ。自分の言動や行動によって対象に影響を与え、その変化を感じ取れる場所にいたいという自分の望みはハッキリと自覚していた。これから後も、例え獣医師としてでなくとも、「現場」から離れた仕事に就くことはないだろうと思う。

私が在学していた頃は、同級生120名のうち、女子学生は3分の1程度だった。麻布大学の特色から、小動物臨床を希望する学生が多かった。私が大動物臨床を希望したのは、都会に生まれ、都会で育ち、自然に対する憧れが強かったためだ。幼少の頃より、シートン動物記や戸川幸夫、椋 鳩十等の動物に関する児童書を読みふけた。今だに本棚に並べられている本もある。ことに、馬に対する愛着は強く、「黒馬物語」は今読んで泣ける。テレビでも（久米 明のナレーションでお馴染みの）野生の王国は毎週必ず見ていたし、野生のエルザとか、ムツゴロウの動物王国は言わずもがなである。獣医学系大学の学生となって、牧場で実習し、先生や先輩の話聞くうちに、牛の臨床を志向するようになった。その当時、麻布大学には近くの津久井郡からよく病牛が搬

入されてきて、一番身近な大動物といえば牛であったし、牛乳も乳製品も大好きだったからだ。都会っ子の考えとして、牛→草原→北海道という安直な図式にはまって、志望は北海道であった。しかし、平成3年当時、北海道のNOSAIは女性獣医師は採用しないという噂があり、やむなく断念した。しかし、大学に来ていた求人票をあたってみると、NOSAI広島からの求人があった。採用試験の日取りが早く、度胸試しに受けようかと考え、よく読んでみると、麻布大卒の獣医師の名前が載っていた。〇〇晴美とあったので、女性の先輩がいる、と思って就職試験を受けてみたところ採用になり現在に至っている。ちなみに、この晴美先輩は男性であった。今の私の直属の上司である。私は良縁であったと思っているのだが、上司にとってはどうであろうか。

今でこそ珍しくはなくなったが、NOSAI広島ではその当時、県外出身者が入会することは少なかった。会う度に、先輩からも農家からも「なんで、広島に来たん？」と聞かれた。広島は中学校の修学旅行で来たことがあるだけで、親戚も知人も一人もいなかったが、私にとっては「北海道も広島も同じじゃん」と思っていたので、周りの反応は面白かった。

— 閑話休題 —

ここで、広島の紹介をさせていただこう。

広島県人は自分達の気質を熱しやすく冷めやすいとか、新しもの好きと評している。自県を誉めることは少なく、田舎であると卑下しているようにみえる。私は神奈川県横浜市で生まれ育ち、大学を卒業するまで暮らした。広島に来て20年が経ち、横浜の生活と同じくらいの時間を過ごしている。私の広島県人評はこうだ。非常に慎重であり、人の和を重んじる。そして度量が大きく、規格外を拒絶しない。長所についても短所においてもである。しかし、問題や欠点を指摘することが苦手な人で、スポ根漫画のスパルタコーチの様な人にはまずお目にかかれない。広島県人が声を荒らげて叱責することがあるとすれば、それは家族に対してだけだと思う（それも少ないと思うが）。相当困った事態に陥っても、昔の学園ドラマの教師のように「信じ」、「待ち」、「許す」と

[†] 連絡責任者：桧山尚子（広島県農業共済組合連合会三次家畜診療所）

〒728-0013 三次市十日市東3-6-36 ☎0824-63-6940 FAX 0824-63-0791

E-mail : sin-miyoshi@nosai-hiroshma.or.jp

いう態度で接する。新人当時、世間知らずだった私が、広島県人の度量の大きい心で数々の無礼を許されていたのだと知るのはずっと先のことであった。そんな大きな優しさの中で、私はこれまで大切に守られ、育ててもらってきた。今ではすっかり態度も言動も図太くなっているが、この恩は忘れていないつもりだ。

広島県の魅力は、大きな心を持つ広島県気質と、天災の少ない土地柄、海・山・川その全てがあり、かつ県内で気候がダイナミックに変化する（知られていないことだが、スキー場も多い）。いろいろな美味しい農産物が収穫できる（中でも柑橘類の豊富さといったら）。10年前に両親も神奈川県の家を引き払い、広島に永住することに決めた。我が家ではたびたび同じセリフが繰り返される。「なんでみんな広島に住まないんだろう？ 良い所なのにねえ。」と。

さて話は戻って、私の新人時代。その頃は管内に女性獣医師が赴任するのは初めて、という診療所もあった。農家も職場の先輩方も戸惑ったことと思う。だが、私は自分のことで精一杯で、あまり女性だからということまで意識していなかった。診療、車の運転、事務仕事、広島弁、一人暮らし等、慣れないことが一遍に襲ってきて、ペースをつかむのに苦労していた。夜8時頃アパートに帰り、疲れてそのまま横になったら寝てしまい、夜中に起きてから夕飯、洗濯、勉強を済ませ、また数時間寝てから出勤するという毎日だった。当時は気付いていなかったが、同じ職場の先輩がかなりフォローしてくれていたのだと思う。

特に就職2年目から3年間お世話になった先輩獣医師からは、診療のみならず、生活の楽しみ方や農家や同僚、関係機関など周りの人との付き合い方に至るまで、各方面の手ほどきを受けた。私にとって自分のスタイルを確立する根幹となった時代であった。しかし、その先輩獣医師はあまりにも優秀であったために、私は劣等感に苛まれ、最初の半年間は趣味の読書もまともにできないほど精神的に落ち込んだ。でも、この頃に味わった農家とのふれあいや信頼された記憶は、その後訪れる追い込まれた状況において、何度も私に勇気を与えてくれる。なにせ、農家の母屋に上がりこんで昼食をご馳走になるのはもちろんのこと、コタツで昼寝はするわ、勝手に冷蔵庫は開けるわの横暴が許されていたのだから、今思うと驚きである。感謝。

数年経つと一通りのことが自分だけでできるようになり、慢心していった。責任ある仕事も任されるようになって、この頃は失敗も多かった。反省して学び直し始めた時、農家との距離感が変わったことを感じた。もう新人扱いではなくなり、農家にとって先生になれたのだと思うとうれしかった。この頃、私には悩んでいたことが

あった。それは気持ちの切り換えができないことであった。夜間早朝の往診依頼が自宅に入るようになっていたが、家にいても休まらないことでストレスを抱えていた。突然の電話で約束や予定が変更になることに怒りや不安を感じていて、その気持ちを整理できずにいたが、やがて自分の心のアイドリング状態を限りなく低くすることができるようになり、リラックスしていても、電話が来れば瞬時にアクセルを吹かせられるようになった。具体的に切っ掛けとなる出来事があったわけではなく、気付いたら、あれっという感じで自然に調節できるようになっていた。ここまで来るのに7年間かかった。順応する時間は遅い方だと思う。だが、この心のアイドリング状態を調節する能力を身に付けて、初めて自分自身を一人前だと思えるようになったのをよく覚えている。

2 農場どないすんねん研究会 (NDK)

こんな風に私は大抵自分のことが精一杯で、周りのことに気付けないタイプであった。転機となったのは、農場どないすんねん研究会（略称NDK）を通して知り合った仲間との出会いだった。

NDKは畜産現場における農家支援の技法を学ぶ研究会であるが、特にコミュニケーション分野における支援方法を教えてもらい、役立っている。この仲間とはなんとなく縁があって、なんとなく繋がっていったという感じであったが、私が受けた影響は大きかった。産業動物獣医師であれば、数年すれば農家対応に悩む時期が来る。NDKの仲間達は「動かない農家を変えるのではなく、自分が変わるべき」と教えてくれた。彼らとの出会いは仕事においてだけでなく、私の考え方全般において大きな変化をもたらした。知らなかった扉を開いてくれたことにとても感謝している。職場の先輩によると、NDKの仲間と交流する以前の私と以後ではガラッと変わったそう。 「いやー、本当に良くなったよね。」と、未だに言われる。それ以前の私は相当に扱いづらかったのだと思う。彼らからは「変わるのは自分」と「アレもありだし、コレもありなんだ」ということを教えてもらい（他にもあるが書ききれません）、この2つの気付きは今後も私の可能性を広げてくれることだろう。

3 女性と男性

NOSAI広島は、獣医師40名のうち、女性獣医師が8名となり、組織として進化しているが、一つの職場単位で見ると周りはほとんどが男性であり、事務職員を除くと女性とともに働くことは少ない。この項では、女性と男性の違いについて私見を述べさせていただきたい。偏見を恐れず断じてしまうが一つの考えとして、お許し願いたい。

私が思うに、男性は考え方がシングルであり、境界が明瞭である。対して、女性は考え方がパラレルで、境界

はあいまいであると思う。例を挙げると、私がもし誰かに何かをして欲しいと思った場合、その頼み方に性差が表れるということだ。相手が男性なら、私はまず「～をして欲しいんです」、「〇〇頃までに」、「～だから」という順番で話すだろう。だが、相手が女性ならまず自分が困っている状況を話し、その後、して欲しいことを説明するだろう。多くの場合（時を上手に選べば）、男性は最後の理由を聞くまでもなく、受け入れてくれる。万が一、「今は無理」と言われれば、すぐさま引っ返め、次のチャンスを待つのがいい。

また、男性が女性のおしゃべりについてよく言う、「オチがない」、「筋がない」、「結局、何がしたいのかわからない」という点であるが、そういった指摘は女性同士なら「だって、おしゃべりだもん」の一言で片付く。女性同士のおしゃべりが本筋から外れて、枝葉、枝葉と話題が移っていくのは当たり前のことだが、男性にとっては気持ちが悪いらしい。この話し方をしていると、男性は「つまり～なんだな」、「～いうことか」と、自分で結着をつけようとする人さえいる。女性からみると、とてもおかしなことだ。なんでそんなことにこだわるのだろうかと思う。

境界については、私が仕事の上で気を付けていることがある。それは、他人の仕事に手出しをしないということだ。例えば、女性と一緒に夕飯を作ることになったとする。女性同士ならお互いに相手の進行状況を見て、足りない部分を補い合おうとするだろう。だが、相手が男性だとすると、私は注意しなければならない。「これとこれは俺が作るから」と、言ったものについては、手出ししてはならないのだ。今は暇だからやってあげようという考えは通用しない。この場合はお伺いを立ててからでないといけない。これはルール違反なのだ。男性同士はこのルールを重んじていて、決して境界を踏み越えることがない。どうやら、プライドに係わることのように思える。私なら、やってもらえてラッキーと思う場面でも、男性はそうは受け取らないようだ。自分の能力を否定されたように感じるのかもしれない。任された仕事もできないのかと。

人として同じであるが、いろいろ異なる男女はやはり一緒に居るべきなのではないだろうか。女性だけ、男性だけという職場もあるだろうが、男女一緒に居る方がバランスが取れるのではないかと思う。異性とのちょっとした冗談や掛け合い漫才みたいな語らいなど、とても心の休まるものだ。少なくとも、私は男性と一緒に働くことができてとても楽しい。向こうもそうであるとうれしいのだが。

4 自分を知り、自分を信じる

先日、同僚（男性）が農場でワークショップを開催し、私も参加させてもらった。私は彼のファシリテーター振りを観察しながら、私だったらこういう場面はこうする、こういうだろうな、とあれこれ考えていた。そんな自分

を視点を変えて観察してみて、ふと気付いたことがあった。ワークショップはファシリテーター（進行役）の人間性の表現なのだ。誰も自分以外の何者にもなれない。彼は数値やグラフを使って、農家を納得させようとしていた。静かに毅然とした態度で。そこには、媚も脅しも一切なかった。私の考えはというと、完全な鮎とムチ方式だった。農家の急所と長所を同時につかんで、揺さぶりをかけようと考えていた。これは取りも直さず、彼と私の違いなのだ。彼は納得したら動く人間で、私は感情が揺さぶられた時に動く人間であるということだ。

私が思うに、この仕事をしていく上で重要なのは自分ができることとできないことを知っていることだと思う。特に、できないことを知っていることは重要で、知っていれば時を移さず、人に頼み任せることができる。臨床獣医師として命の現場にいる以上、大切な点だ。できないは性差によって決められているのではないと思う。男女の違いよりも、状況判断と段取りする能力、そして困難な状況でもあきらめず最善を尽くそうとする精神の強さを持っているか、否かが成果に影響を与えるだろう。結局は自分を知ることが最強の武器になる。

私は農家から「この仕事を女性でやっていけるのか？」と直接聞かれたことはないが、数年前に実習に訪れた女子学生が農家にいわれたらしく、悩んでいたことがあった。私はこんな例え話をしたと思う。「もし、家族が重い病にかかり、病院に行ったとする。『私が主治医です』と自分のような医者が出てきたらどう思うか」私が家族ならガッカリするだろう。私はその時求めているのは、年配でベテランの男性医師だ。私自身の中にも男女差別があるというのに、農家を責められるだろうか。安心したいという気持ちに理屈でフタができるだろうか。無理というものだ。だが、悲観することでもない。幸いにも、農家は同じ技術屋なのだ。技術をみて、納得すれば認めてくれる。自分の仕事をきちんとやっていれば、やがて第一印象は変わっていくだろう。重度の外傷で一刻を争う状況だというのに、私の顔を見るなり農家の人が「もう、血が吹いとるところを摘んどけていわれても、指がつりそうだって！」と、おどけながら軽口を飛ばしてくるのは安心からだと思っている。

また、仕事ができるできないは個人の才能の有無によるのではないと思う。（学生の時には分らなかったが、社会に出れば誰でも気付くことだ）。それどころか、才能の持ち腐れというタイプは世間に溢れていて、持っている才能を発揮している人の方が珍しいくらいだ。自分を信じることができずに、才能を発揮せず人生を終わるのだとしたら、なんとも残念なことだと思う。今、その手に持っているものがいかに少なく思えても、自分を知り、自分を信じるなら、大抵の望みは叶うのではないだろうか。あなた自身であれ。